



# 素直さ・思いやりの 相互交流

文 | toshi  
イラスト | 秋野 純子

二年生にふさわしいと考えました。

通学路の途中にコンビニエンスストアがあります。この店の前を通学する子どもたちは、店の前を通りかかると、なぜか歩道を通らず、店と、その前にある駐車場との間を通って通学するのです。子どもたちはその後右折して、脇の小道へ入っていくのです。「お店の邪魔にならないかな。お店はよく許しているな」私はそう思いました。後日、お店の方にかがいましたが、「昔からなので、いきさつはわかりません」とのことでした。

私は近年、初任者指導が、三・四年生の社会科専科を仰せつかることが多いのですが、数年前、一つの学校で両方を同時に行ったことがありました。一人は三年生の担任だったので、そのクラスで行う社会科の授業は、全て示範授業の趣がありました。しかし、もう一人は二年生の担任だったので、生活科の示範授業を折々に行っていました。本記事は、その二年生の担任のことが中心になります。

## ○新米先生の成長

「まちたんけん」の単元で、私は数時間、通学路を取り上げました。というのは、通勤途上で、一か所、「ほおつ。これはおもしろい」と思う事象に出くわしたからです。通学路の学習は普通「町の安全を守る」単元の警察を扱う中で行いますが、ある一つの思いから、

授業でこのことについて話し合いました。子どもたちからは、「このように通った方が安全だ」「車もお店の駐車場に入りやすい」「子どもが歩道を通り過ぎるのを車道で待つ必要がないから、道路が渋滞しなすむ」などという発言と、それに賛同する声が上がりました。意見がまとまりかけていました。そのときAさんが、「あれっ」と思う発言をしました。「歩道は車道とくっついていてるから危ない」と言うのです。私はその意味が理解できず、「子どもが車道に飛び出すということなの」と問い返しましたが、どうもそうではなさそうでした。逆に、車が歩道に乗り上げる心配をしているわけでもなさそうです。Aさんの答えが要領を得ないので、私はそのままやり過ぎてしまいました。



子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

### < toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

授業の後、新米先生に言われました。「Aさんの発言はおもしろいと思います。私は、Aさんが言っているのは『歩道とはいえ、車がひっきりなしに通る道路のすぐそばは通らない方がいい』ということだと思いました。授業中、Aさんの側に行ってみると、確かに『車がすぐそばを通るから、ヒヤッとする時がある』ということのようでした。O先生は、コンビニの前方にある車止めの柵を写真に撮っていたし、やいましたよね。車止めの柵は安全を守るものですから、それにもつながるのではないのでしょうか」

いやあ。参りました。「すごい。先生の言うとおりだ。勉強になったよ。どっちが新米先生か、わからなくなったなあ」とすると、新米先生は赤面しながら、「そんなでもない。そんなことないです。O先生がいつも『子どもの発言に意味のないものはない。発言の奥にある子どもの思いを知る努力が大切』とおっしゃっていますから、ちょっとそう思っただけなのです」

「出藍の誉れ」という故事成語がありますね。それを思い出しました。新米先生の成長は、指導教員にとってもうれしいことでした。

大人はつい子どもの発言を難しく考えてしまうことがあります。子どもの思いは単純素朴なのです。

### ○素直さが成長を後押しする

この新米先生はいつも明るく素直で柔軟な心の持ち主。それで、私の言うことをどんどん吸収していきました。

こんなことがありました。着任してすぐのころです。ある子どもが問題行動を起こした際、子どもが「ごめんなさい」を言うまで許さないので。意地を張る子の場合はずっと謝りません。しかし新米先生は、他の子らに自習させてまで叱り続けていました。しかし結局根負けし、指導はうやむやのうちに終わってしまいました。こんなことを繰り返してしまいましたから、その子との関係も悪くなっていきました。

「時間をかけない方がいい。5、6分たってもらえば明かかったら、『素直に謝ってくれたら先生は嬉しいんだけれどな。これからがんばれ』と言う程度で切り上げた方がいい。そしていいところをほめることを忘れなければ、やがて謝る場面も出てくるかもしれない。そうしたら抱きしめるくらいに喜んでやればいい」私はそう助言しました。

それをすぐ実践に移した新米先生。効果はてきめんでした。年度末になると、多くの子どもがすばらしい変容をとげ、学級は明るく楽しく、そしてよくまとまっていきました。

さて、話を通学路に戻します。私は

これを二年生で学習させたいと思ったわけですが、それは、お店の好意を感じたからでした。

授業の前に取材してみると、お店の方が本校の子どもたちを大好きであることがわかりました。「この学校の子どもたちはしつげが行き届いていると思います。よく挨拶してくれます。前勤めていた店舗では、子どもがランドセルを背負ったまま、よく店内に入ってきました。猛暑の頃は涼んだり、冷水器の水を勝手に飲んだりする子がけっこういたのです。でもここでは、そんな子は一人もいません」

素直さ、思いやりは相互交流なのです。そこにこそ、生活科で取り上げる意味があると思いました。

